2020年度　附属中学校「教育相談室」活動報告

青木　真理[*a]・金成　美恵[*b]・穴澤　一高[*c]・相模　由紀[*d]
小松　拓也[*e]・菅野　重徳[*f]・佐久間康之[*g]

附属中学校を中心とする「教育相談室」活動に関して，2020年度の活用内容，相談件数と内容などについて報告し，今後の課題を検討する。

〔キーワード〕教育相談室　スクールカウンセラー　大学附属学校　全員カウンセリング　教育相談組織

Ⅰ　はじめに

福島大学附属四校園では2006年度に，スクールカウンセラー配置をともなう「教育相談室」が設置され，附属中学校を活動母体として運営されてきた[1)2)3)4)5)6)7)8)9)10)11)12)13)14)15)16)]。スクールカウンセラー配置と「教育相談室」設置の経緯は以下の通りである。

「教育相談室」設置に先立ち，2002年度からスクールカウンセラー（以下SC）が配置された（青木が大学と兼務）。教育相談室設置後，2006年度には非常勤職として金成が６月より雇用され，SCは２名体制となった。金成は附属中学校に加え附属小学校にも勤務している。また，ニードに応じてSCは附属中学校に隣接する附属幼稚園の保護者の相談に応じるとともに，教諭のコンサルテーションも行う。

本報告は2020年度の「教育相談室」について，附属中学校を中心としたSCの活動，附属中学校の教育相談推進委員会活動等の観点から報告する。特に本年度は新型コロナの影響のもと手探りでおこなった活動が多く，例年より校内連携が強く意識された運営となった。執筆の分担は，Ⅱ～Ⅴを青木と金成が協議しながら執筆，Ⅵを穴澤，Ⅶを相模，Ⅷを小松が執筆し，そのうえで執筆者全員が議論を行い，青木の責任で全体をまとめた。

Ⅱ　スクールカウンセラーの活動状況

１．活動形態

本年度の勤務形態は例年通り青木が月２回，金成が月６回であるが，新型コロナの影響で５月までの２ヶ月間は勤務時間を短縮し，授業が延長された夏休みの時期に振替勤務をするなどした。勤務日数は100日で例年並みである。活動の場は主に附属中のスマイル・ルームと呼ばれる相談室で，別室登校生徒の様子を見るために保健室に行ったり，教諭との情報共有のために教科準備室に足を運ぶこともあった。

２．来室者数・来室回数・相談内容

来室者数は176名でそのうち136名は全員カウンセリングでの来室であった。全員カウンセリングとはSCが本校で学年単位で実施している短時間カウンセリングである。本年度は１年生のみの実施となり，例年の半数である。通常カウンセリングは40名で，内訳として生徒は21名，保護者は19名である。通常カウンセリングでは21名中15名は３年生で，平均来室回数は5.8回と継続カウンセリングのケースが多かった。2020年度来室者数を表１に示す。

表１　2020年度来室者数

来室者数 176名	全員カウンセリング	136名（１年生対象）
	通常カウンセリング 40名	生徒 21名 １年生　４名 ２年生　２名 ３年生　15名
		保護者　19名

※なお一人の生徒が複数の目的で来室する場合があるため，生徒実数とは一致しない。

来室回数は全体で360回で，生徒の来室は248回，保護者カウンセリング60回，教諭とのコンサルテーションが52回である。生徒の来室回数の内訳は全員カウンセリング136回，通常カウンセリング生徒112回となる。生徒カウンセリングには電話相談の件数を含めている。教諭とは通常，校務支援システム通して情報共有するが，本年度は休校期間中に今後の対応について打合せをしたり，学校再開後も対応方針を協議したりす

表２　2020年度来室回数

来室回数　360回			
内訳	生　徒	248回	全員カウンセリング　136回
			通常カウンセリング　112回
	保護者	60回	
	教　諭	52回	

＊a　学校臨床支援センター・附属中学校スクールカウンセラー　＊b　附属中学校スクールカウンセラー　＊c　附属中学校教諭
＊d　元附属中学校養護教諭　＊e　元附属中学校主幹教諭　＊f　附属中学校副校長　＊g　福島大学人間発達文化学類，附属中学校校長

ることが多く，前年よりも回数が増えた。表２に2020年度来室回数を示す。

相談内容は不登校に関する悩みが一番多く，ついで友人や家族など対人関係の相談が多かった。例年と同じ傾向である。表３に2020年度相談内容を示す。

表３　2020年度相談内容

不登校（別室登校含む）	20名
対人関係（友人，家族を含む）	14名
身体症状	２名
その他	４名

※なお，相談内容は複数の項目にわたることが多いため主たる相談について集計した。

Ⅲ　附属中学校の2020年度の活動内容

１．１年間の動き

本年度は４月７日に国から東京など７都府県に対して緊急事態宣言が発出され（その後４月16日から全国に拡大），同日福島市は４月８日からの臨時休校措置を発表した。４月７日は附属中学校では始業式・入学式があり，その翌日から臨時休校となった。入学式を終えた新入学生は翌日から自宅で過ごすこととなり，異例ずくめの年度始めとなった。

相談室では休校期間中も希望者には対面でのカウンセリングを実施し，また電話相談にも応じた。休校期間中に来室した生徒は，家庭で過ごす時間が長いことから，家族との衝突が増えたことや，また兄弟だけで過ごす時間が長くなり，思うように自分の学習や息抜きの時間が取れないなどの悩みを話していた。

電話相談については，実施の連絡は保護者へのメールシステムを利用し告知した。また健康アンケートの中にSCとのカウンセリングや電話相談の希望の有無を尋ねる欄を設け，生徒の意思確認をした。電話相談の際は，生徒が気兼ねなく話ができる状況にあるかをSCが確認できないことから，踏み込んだ内容の話は避け，通常カウンセリングよりも短時間の相談とした。相談者の中には，楽しみにしていた新生活がスタートできなかった残念な気持ちを話したり，新しい友人ができるだろうか，などの不安を話すものもあった。

SCたちは４月から５月にかけての勤務日は，電話相談のために相談室で待機しており，その間SCだよりの作成や教諭とのコンサルテーションに時間を割くことができた。一方生徒たちにとっては休校中も相談室にSCがいることで，学校に“通常の生活がある”ことを実感し，非常事態の中でも安心感が得られるよう配慮した。世の中の動きが止まったような時期に，悩みや不安，不満について話ができる人が学校にいることを感じてほしいと考えた。

５月中旬に分散登校が開始された。普段より教室で一緒に過ごす人数が少なく，滞在時間が短いこの時期は，学校への適応に時間がかかる生徒にとっては適応しやすい条件となり，出だしの登校状況はよい傾向にあった。例年のようにエンジン全開で新生活を始めるのではなく，徐々に学校生活に自分を慣らすような新生活の始まりに救われた生徒は複数いたと思われる。しかし中には６月から通常登校が始まると休校以前の不登校状況に戻る生徒もあった。

６月に通常登校となってからは相談室も感染予防対策をとりながら，ほぼ以前と同じ相談活動が再開され，来室した生徒たちは普段考えなかった学校生活の有り難みや家庭以外の居場所の大切さなど思い思いに話をしていた。

またストレスマネジメントの内容を入れたSCの講話が昼休みに校内で放送され，学校全体で生徒を支える体制を示すことになったと思われた。

対面相談の再開にあたり，密室でのカウンセリングに躊躇する生徒がいることを想定し，換気や透明のパーティションを置くなどの感染予防対策をとった。この時期は県内の感染者数が少なく，感染のリスクを身近に感じることが少なかったのか，生徒たちはむしろ語る場を求めているように感じられた。実際本年度は年度末まで予約のキャンセルが少なかったことも特徴的であった。

また例年４月から実施している１年生の全員カウンセリングは７月からの実施となった。実施にあたっては教育相談推進委員会（後述）で実施意義や方法を協議し，社会全体に不安が拡がっている時期であるからこそ，生徒の気持ちを個別で確認し安心感が得られる対応が必要であるということで実施の運びとなった。生徒たちには感染予防対策が取られていることを説明し，しかし教室に比べて狭い相談室での会話に不安がある場合は，受けない選択をする自由があることを伝えた。

２．新型コロナ流行下の活動

新型コロナの流行は１年間を通して様々な活動に影響を及ぼした。相談室では感染予防について入退室の際の手指消毒や換気，アクリル板の設置，ソファ設置位置の距離を置くことなど対策をとった。対面でのカウンセリングについては，新型コロナ流行の影響が強い時期だからこそ，生徒一人一人の心理的不安に対応が必要という共通認識のもと，できる限り通常に近い形式で実施した。

学校生活は休校から始まり，学校が再開されても授業内の話し合い活動は大幅に減り，また休み時間や昼食時のおしゃべりを控えるよう求められ，生徒たちの日常の楽しみは縮小された。行事も延期や中止，開催方法の変更など，予定通りできたものが少なかった。

９年前の東日本大震災の際は，福島市内では放射線による健康被害が心配され，屋外での活動を制限されるなど生活様式や行事などの変更を余儀なくされた。

当時の生徒たちは持て余したエネルギーを友人との会話や関わり合いで放出していた様子が見受けられ，ストレスを抱えながらも，学校という健康度の高い場でバランスを保っていたように感じられた。

しかし今回のコロナ禍では接触を伴う関わりを控えなければならず，学校で仲間と閉塞感や苦しさを共有する機会を十分提供できないことは悩ましい状況であった。

３．個別カウンセリング①：全員カウンセリング

全員カウンセリングとは対象学年全員の短時間カウンセリングで，附属中学校では2014年度から継続している。当初いじめの予防，早期発見を目的に始めたが，生徒とSCが個別に話すことで，相談室への来室のハードルが低くなり，学校が生徒ひとりひとりを見守る体制を示す活動になっている。例年の対象学年は１年生と２年生で，在学中に２回SCと個別に話す機会を作ってきた。しかし本年度は臨時休校期間があり，７月から１年生のみの実施となった。

全員カウンセリングでは休校中の気持ちや不安などに触れることがあったが，中学校の様々な“初めて”に時間をかけて取り組めたことで，少しずつ中学生になっていく過程を辿れた様子が伝わった。とりわけ公私立学校からの入学者は新しい環境に馴染めるかどうか不安に感じる時間が長かったことが心配されたが，分散登校が始まり半数ずつあつまるクラスメイトとの丁寧な関わりが功を奏したようであった。

４．個別カウンセリング②：生徒通常カウンセリング

本年度は３年生の継続カウンセリングが多かった。概ね２年生からの来室者であったため，カウンセリング内で内省の機会を得て，自己理解が進んでいるように感じられた。また新型コロナ流行のために他者と話す機会が減ったこともあり，時間をかけて自分を見つめる時間を求めていたように思われた。

５．個別カウンセリング③：保護者カウンセリング

例年，生徒と保護者の両者がカウンセリングを受ける親子カウンセリングのケースは多いが，本年度の保護者カウンセリングは親のみでのカウンセリングが例年より多かった。また自主来談も複数あった。学校の中でのSC活用が生徒だけでなく保護者にも拡がり，定着してきた印象を受けている。この中には次年度入学予定の附属小学校の保護者も含まれており，連接活動の定着も推察される。

６．教諭とSC連携

教諭とのSCの連携に関しては後述の教育相談推進委員会での活動が中心であるが，必要に応じて個別の情報共有に時間をとることがある。特に４月からの臨時休校期間中に，日頃直接話す時間がなかなか取れない教諭と共有時間が生まれたことで，例年以上に連携を取ることが可能となった。

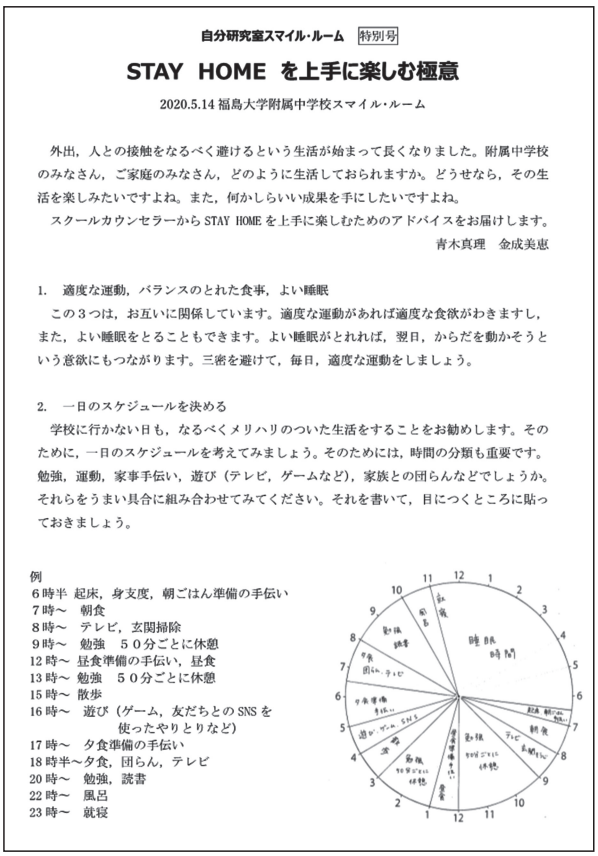
また養護教諭を中心に４月に実施した健康アンケートでは“いらいら”や“だるさ”“睡眠問題”を訴えるデータが示され，SCも交えて今後予想される状況などを検討した。

その他臨時のケース会議が持たれたこともあった。生徒の心理状態や対人関係が悪化していることがわかった際に，関係する教職員が時間を取り，現状の確認と今後予測される状況やその際の注意点，それぞれの役割分担などを確認しチームで対応した。

７．広報活動

SCだよりの主な目的はSCの勤務日を知らせるためであるが，時機にあわせてSCから生徒に伝えたいことを載せたり，全員カウンセリングの進捗状況を伝えることなどもあった。本年度は６回発行した。

特に本年度は臨時休校の時期に特別号を発行し，在宅時間の過ごし方を提案したり，またその時間にそれぞれが自主性を育める時期であるという意識付けの内容のメッセージを発信した。



自分研究室スマイル・ルーム　特別号

STAY HOME を上手に楽しむ極意

2020.5.14 福島大学附属中学校スマイル・ルーム

外出，人との接触をなるべく避けるという生活が始まって長くなりました。附属中学校のみなさん，ご家庭のみなさん，どのように生活しておられますか。どうせなら，その生活を楽しみたいですよね。また，何かしらいい成果を手にしたいですよね。

スクールカウンセラーから STAY HOME を上手に楽しむためのアドバイスをお届けします。

青木真理　金成美恵

1.　適度な運動，バランスのとれた食事，よい睡眠

この３つは，お互いに関係しています。適度な運動があれば適度な食欲がわきますし，また，よい睡眠をとることもできます。よい睡眠がとれれば，翌日，からだを動かそうという意欲にもつながります。三密を避けて，毎日，適度な運動をしましょう。

2.　一日のスケジュールを決める

学校に行かない日も，なるべくメリハリのついた生活をすることをお勧めします。そのために，一日のスケジュールを考えてみましょう。そのためには，時間の分類も重要です。勉強，運動，家事手伝い，遊び（テレビ，ゲームなど），家族との団らんなどでしょうか。それらをうまい具合に組み合わせてみてください。それを書いて，目につくところに貼っておきましょう。

例
6時半 起床，身支度，朝ごはん準備の手伝い
7時～　朝食
8時～　テレビ，玄関掃除
9時～　勉強　５０分ごとに休憩
12時～ 昼食準備の手伝い，昼食
13時～ 勉強　５０分ごとに休憩
15時～ 散歩
16時～　遊び（ゲーム，友だちとの SNS を使ったやりとりなど）
17時～　夕食準備の手伝い
18時半～夕食，団らん，テレビ
20時～　勉強，読書
22時～　風呂
23時～　就寝

3.　週単位のスケジュールと記録

２．は一日の大まかなスケジュールです。それとは別に，週単位でスケジュールを立てます。勉強なら，いつ，何の科目を勉強するか。もっと具体的にワークブックの○ページから○ページ，と書いてもいいでしょう。
みなさんが学校からもらう週単位の時間割を自分でたてるのです。まるで，学校の先生になったような気持ちで。これも目のつくところに貼っておきましょう。そして一日の終わりに，その日のふりかえりを簡単に記すとなおいいでしょう。
例　だいたい予定通り。思ったより数学の○○が難しくて進まなかった。など。

4.　自分のための時間　ほかの人のための時間　ほかの人と共有する時間

スケジュールを見るとわかると思いますが，時間の使い方には３種類あります。自分のための時間，ほかの人（家族）のための時間　そして家族と共有する時間。
勉強の時間は自分のための時間。玄関はきの家事手伝いは，家族のための時間ですね。そして，食事の準備の手伝い，夕食，団らんなどは，家族と共有する時間。

5.　からだほぐし

勉強の合間などに，からだほぐしもやってみてください。インターネットなどで調べると，いろいろな体操，運動が出ていますよね。からだほぐしは，心ほぐしにもつながります。簡単なものに，肩に力を入れてぎゅっと持ち上げ，ストーンと落とす，というやりかたがあります。同じ姿勢を続けていると，からだがこわばってきます。そんなとき，この肩ギュッストーンをやってみてくださいね。

6.　電話相談

スクールカウンセラーは，勤務日に電話相談を受け付けています。スクールカウンセラーだよりを見てください。困ったり悩んだり，なんだか気持ちがもやもやするな，というときに，電話相談を利用してみてくださいね。

＊ジュール・ベルヌの『二年間の休暇』という小説があります。日本では『十五少年漂流記』というタイトルのほうが知られているかもしれません。アクシデントで少年だけが乗った船が漂流し，やがて故郷に帰る日までの２年間を少年たちがどのように過ごしたか，工夫したか，楽しんだか，というお話です。少年たちは対立もしますが，話し合いで対立を超えようとします。合議制でスケジュールと役割分担を決めます。大統領さえ選びます。お話は，少年たちが少しずつ成長していた，と締めくくられます。二年間の思いがけない休暇の中で，少年たちが自分たちで考えて計画し，行動したことが，少年たちを成長へと後押ししたのです。その２年間は自分を磨く時間であり，またお互いのために役立つ喜びを見出す時間でもありました。
どうぞ，このSTAY HOME　期間が，附属中学校のみなさんを，またその家族の方々を，成長させる時間となりますように。

図１　SCだより

他の広報活動として，前述した学校再開後の校内放送での講話や，２月に大きな地震が起きた後にも非常時に起きうる心理状態や体の変化など心理教育を取り入れた内容の放送をした。不安な気持ちが続くときはSCたちが力になることを伝え，安心感をもって学校生活が送れる支援体制があることを案内した。

８．次年度に向けて

全員カウンセリングは本年度７年目の試みで，生徒にとって身近なSCとなってきたことを実感することが多い。例えば初回カウンセリングでの生徒の不安やSCへの警戒心は，以前に比べると和らいでいると感じられる。それはカウンセラーが全員カウンセリングで会ったSCであることが要因と考えられる。全員カウンセリングはSCが一部の生徒のためのSCではなく，全生徒にとってのSCであることの実感を得やすい活動であると考えており，今後も継続していくものであろう。

一方本年度は保護者カウンセリングが増加し，また自主来談が増えたというのは既に述べたとおりである。このことを受けて保護者にとっても，より身近なSCであることを広くアピールする必要があると考えている。中学生は発達段階的に保護者との関わりがまだまだ深い時期で，保護者のサポートの成果が見えやすい。しかし保護者自身も思春期の子どもの対応に迷い悩む時期であるため，SCが保護者を支えることが間接的に中学生を支えることにつながる。生徒だけでなく，保護者にとっても身近なSCとなるよう，保護者向けの働きかけができないか検討中である。

Ⅳ　小学校での活動

１．活動の概要と活動データ

附属小学校での活動は21日で，カウンセリング回数は74回，カウンセリング人数41名であった。附属小学校での活動の場はほっとルームと呼ばれる少人数支援室で，支援担当者がSCの予約管理や担任教諭との橋渡しの役割を担っている。支援室担当者の主な業務としては個別対応が必要な児童への心理支援や，集団不適応状態に陥っている児童に対し担任教諭と協力して支援にあたることで，ほっとルームは児童が悩みを相談ができる場となっている。児童にとって教諭以外に相談ができる場は，自分や周囲の状況を観察する機会がもちやすく，ほっとルームは多角的な見方を助ける役を果たしていると言えよう。

学校の校務分掌としての教育相談部門には担当教諭がおり，学校全体の教育相談活動やSC勤務日ごとの活動報告会などをコーディネートしている。

２．カウンセリング

保護者からの申込みが増えていることも附属小学校での活動の特徴に挙げられる。近年子育てを巡る環境には様々なネット情報が溢れており，保護者は多くの情報を手に入れることができる一方，振り回されてしまう懸念もある。子どもたちが毎日通う学校にちょっとした悩みを相談できるSCがいるということで，活用が進んでいる可能性がある。附属小学校では継続的に保健だよりに保護者向けコラムを掲載しており，気軽に相談してもらうためのきっかけとなるよう心がけている。

３．コンサルテーション

附属小学校ではSC活動日の最後の時間帯に活動報告会を設けており，年々その会が有効に働いていることを感じる。この報告会はカウンセリングや行動観察の対象児童の関係者が集まり，児童像など情報を共有し，今後の関わりの方針や具体策について決定している。担任教諭だけでなく，管理職や養護教諭など教室以外の場での様子なども共有するため，多面的な情報が集まってきて，翌日からの対応について具体的な策が作られる。複数の立場の関係者はそれぞれが専門家であり，そうした人達が顔を揃え話し合い，その場で方針や具体策を決定される有機的な会になっている。

４．着任教諭カウンセリング

着任教諭カウンセリングは多忙な教諭のメンタルヘルス向上を目的に始められた。困ったことが起きたら相談するのではなく，困ったことが起きる前にSCと出会い，顔なじみのSCに気軽に相談ができる体制を作っている。教諭自身は意欲をもって新しい職場に入ってきているが，それゆえオーバーワークになりがちで，このカウンセリングが健康全般の気付きの機会になっている。他方業務的にも，その後の連携が円滑に進むことが多い。

なおこのカウンセリングは管理職への報告の必要はなく，教諭が自由に話せたり情報を求めたりできる場として当初から確保されている。

５．附属小学校と中学校の連接

毎年附属小学校と附属中学校は引継ぎを目的とした連絡会を設けており，本年度もSC ２名が参加し，切れ目のない支援のための情報共有をした。

保護者を対象とした卒業前相談会も毎年実施されているもので，附属中学校への入学を前に不安があり，事前の情報を確認したい保護者に中学校のSCが対応している。今年度は２件の申し込みがあり，保護者カウンセリングを担当している青木が対応した。附属中入学後も必要に応じてフォローカウンセリングを実施している。

６．新型コロナへの取組

今年度は新型コロナに対する児童の不安状況を把握するために，養護教諭を中心にアンケートを作成し定期的にアンケート調査を実施した。調査の結果から見えてきた児童の状況などの見立てを，養護教諭や教育相談担当教諭，少人数支援室担当者などで検討し，児童への心のケアの対策などを協議した。

Ⅴ　附属幼稚園での活動

幼稚園の要請で保護者カウンセリングを４回行った。

Ⅵ　教育相談推進委員会

１．組織

全校の教育相談活動を包括的に推進する目的で2006年度に発足した委員会である。メンバーは委員長（穴澤一高），各学年より１名ずつの委員，校長，副校長，主幹教諭，養護教諭，SC ２名である。

２．会合とその内容

会合は原則として月１回，第２週木曜日のSCの出勤日にあわせて開催した。内容は，カウンセリングを行っている生徒・保護者，また相談室を時折訪問している，もしくは以前に相談室を訪問していた生徒について，情報交換や今後の対応についての協議を行った。

会は，校長と副校長からの指示伝達事項から始まり，各学年からの報告，SCによる報告と助言，SCとの協議の順で概ね行った。

会での話し合いの内容は，各学年の担当教諭が各学年のスタッフや担任に伝えるとともに，養護教諭からの会議の記録を全職員で確認し共通理解を図った。また，状況に応じて当該生徒の担任教諭にも参加を求め，ケース会議を行った。支援の方法などについて，担任教諭がSCの知見や助言を直接受けられるよい機会であるため，今後も必要に応じて開催したい。

３．成果と課題

本年度の成果は，情報交換だけで終わらなかった点である。学年としてどのように対応したいのかをSCに相談し，今後の方策を話し合い，翌月に成果を確認し，また取り組んでいくというサイクルで会を運営できた。また，本校で導入されている校務支援システムの「生徒指導記録」に，生徒の様子を記録するだけでなく，担任教諭が対応や支援についてSCに助言を求めたいことを記入することで，生徒・保護者の様子から，担任の困っていることを相談できる場にもなった。さらには，SCの相談記録も校務支援システムの「生徒指導記録」に入力し，委員を初め該当生徒の学年主任も目を通すことで，記録簿を回覧するよりも格段に時間短縮となり，閲覧しやすい環境が整備されたことも成果であった。

また前述のとおり，対応について急を要する生徒等についてケース会議を開き，今後の対応について協議する場をもつことができたことは，学年の担当教諭を介さず，当該生徒の担任教諭がSCの助言を直に受けることができ，対応がスムーズに進んだ点で有効であった。

課題は生徒指導委員会等との連携である。生徒指導と教育相談で重複している生徒もいるので，より効果的な指導を行うために，いかに生徒指導委員会等と連携を図るかについて検討が必要である。前期の途中からそれぞれの委員会で報告する内容を分けることで会の時間短縮を図ることができた。しかし該当生徒等が増加傾向にあり，情報交換するだけでも，会議が長時間になってしまっている。事前に資料を配付し読んでおいてから会議に臨むようにしているが，改めて学年の意向や今後の方向性等を各委員があらかじめ把握しておくことが重要である。事前に資料を配付して参加者が目を通すことは，委員会開催直近までの生徒の日々の様子を記録したり，担任の困り事を入力したりすることもあることから，難しい現状であるが，改善策を模索していきたい。

（穴澤一高）

Ⅶ　保健室との連携

今年度の保健室とSCの連携として，予約の管理，カウンセラー日誌の回覧，別室登校生徒への対応，心理実習生の指導があげられる。

予約管理については，今年度は予約日の２，３日前に該当生徒の担任に予約日時を伝え，該当生徒と授業者への連絡を担任に依頼した。そうすることで，生徒が予約日を忘れてキャンセルになることを防いだり，不登校傾向生徒への事前連絡をしたり，授業時間の生徒の所在確認に役立った。

カウンセラー日誌の回覧については，校務支援システムでの回覧が習慣化され，よりスムーズな情報伝達が可能となった。

別室登校生徒への対応については，以前までは，保健室や保健室隣の保健相談室を利用し，別室登校生徒への対応を行っていたが，今年度は新型コロナウイルス対応のため，保健室での長時間受け入れが難しい状況となった。そのため，図書室や多目的室，教官室で別室登校生徒は過ごすようにし，学年教師や後述する心理実習生が別室登校生徒の対応を行った。特に３年生の別室登校生徒が多かったため，学習の補充という点において，学年教師や心理実習生との学習は効果的だった。養護教諭は，学年教師や心理実習生と生徒のつなぎ役となることを心がけた。また，教室で過ごしている生徒でも，精神的に不安定な生徒に対して，保健室で話を聴く等の対応をすることが多かった。別室登校生徒や精神的に不安定な生徒の対応については，SCからの助言をもらいながら対応に当たった。

心理実習生の指導に関しては，今年度から受け入れが始まり，11月から12月までの間，３名の心理実習生の受け入れを行った。実習に関しては，初めての試みであったが，別室登校生徒の対応だけでなく，ミニカウンセリングの手伝い，授業参観を通して気になる生徒の早期発見，カウンセラー便りの作成等，カウンセラーとしての実習になるよう心がけた。別室登校生徒の中には，心理実習生との学習をきっかけに登校するようになった生徒もおり，学生という距離の近さや教師とは違った立場であることが，特に勉強に苦手意識を持っている生徒にとって有効だったと思われる。以前，学習支援員として福島大学の大学院生に来てもらっていた時も，同様に学生との勉強をきっかけに登校する生徒がみられたことから，今後も，心理実習生や学生ボランティアの活用が望まれる。

（相模由紀）

Ⅷ　主幹教諭より

近年，本校でも悩みを抱えている生徒・保護者や不登校生徒の増加など，心の在り様と関わる様々な問題が生じている。そこで生徒や保護者の抱える悩みを受け止め，「心の専門家」としてSCの役割が大きくなっている。本校のSC及びそれに関連する諸活動は，効果的に機能しており成果を挙げている。ここでは，主幹教諭の視点でその成果と課題について述べる。

成果は２つ挙げられる。１つ目は，小中学校の９年間を２人のSCで継続してカウンセリングできることである。生徒・保護者との信頼関係が構築され，円滑な相談ができる。また，９年間の発達段階に応じた助言ができ効果的なカウンセリングとなっている。２つ目は，教育相談推進委員会やケース会議への参加である。生徒の様子を教師とSCが共有することで，「心の専門家」から専門的な助言を受けることができ，適切な指導・助言を行うことへ繋がっている。このことは特に経験年数が少ない若い世代の教諭にとって大きな支えとなっている。年々，生徒指導面での対応や保護者対応が多様化していると言われる昨今，大変効果的である。特に，医療機関や関係機関と連携など教諭だけでは判断が難しい部分についての助言は，貴重なものである。

次に課題を２つあげる。１つ目は，SCの常駐である。週に２～３回の勤務であり，勤務日には，生徒，保護者のカウンセリング予約が多く入っている。よって，新規にカウンセリングを行いたい場合は，日にちを待たなければならず，対応が遅くなってしまうことがある。２つ目は，スクールソーシャルワーカー（以下SSW）の活用である。いじめや暴力行為，問題行動を起こす児童･生徒の背景には，心の問題だけでなく，家庭や生活環境もかかわっていることが多い。そういった複雑に絡まる問題の解決を学校のみで目指すのは容易なことではない。子どもたちの環境と直接関わり合いながら問題の解決を目指すためにも積極的に導入を検討したい。

以上，成果と課題を述べた。このように現在のスクールカウンセリングは大変効果的に機能している。これからも生徒の成長のために，教職員とSCが協力して組織的，計画的に生徒への援助を行っていきたい。

（小松拓也）

Ⅸ　まとめ

2020年度は世界的パンデミックという，誰も経験したことがない状況での教育相談室活動であった。とまどいと先行きの見えなさの中での活動であったが，平成13年に始まってその都度修正を加えながら形作られてきた教育相談体制があったから，猫の目のように変わる状況の中でも柔軟に小さい修正を加えながら活動を行うことができた。

全体を見渡すと，ミクロレベルの活動とマクロレベルの活動がうまく連動していることが，「教育相談室」活動の特徴であると言える。すなわち，各学級担任および各学年での教育相談活動，保健室の活動，SCの個別の活動等，様々なミクロレベルでの活動を教育相談推進委員会というマクロレベルの組織がまとめあげ

て相互に情報と意見を交換できるようになっている。

SC活動についていえば，問題に応じた相談活動と，予防的・開発的相談活動として全員面接の双方への注力が活動の柱となっている。

今後は，散発的な欠席など不調のサインを丁寧にとりあげて対応する，また，小学校と中学校のより緊密な連携を行うことにより，より予防に焦点化した相談活動ができるようにしていきたいと考える。

引用文献

1）青木真理，佐藤文子，石井博行，君島勇吉「平成14・15年度　附属中学校カウンセリング・ルーム活動報告」福島大学教育実践紀要第47号　pp63-66　2004

2）青木真理，渡部由美，佐藤敏宏，石井博行，君島勇吉「平成16･17年度　附属中学校『教育相談室』活動報告　福島大学総合教育研究センター紀要　創刊号　pp115-118　2006

3）青木真理，金成美恵，渡部由美，遠藤博晃，天形健，君島勇吉「平成18年度　附属中学校『教育相談室』活動報告」 福島大学総合教育研究センター紀要　第３号　pp109-112　2007

4）青木真理，金成美恵，渡部由美，橋本浩幸，天形健，島義一「平成19年度　附属中学校『教育相談室』活動報告」 福島大学総合教育研究センター紀要　第５号　pp97-100　2008

5）青木真理，金成美恵，安藤久美子，安田雄生，天形健，島義一「平成20年度附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要第７号　pp81-85　2009

6）青木真理，金成美恵，樋上聖，二瓶久美子，島義一，白石豊「平成21年度　附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要第９号　pp49-53　2010

7）青木真理,金成美恵，樋上聖，根本光二，菅野重徳，小針伸一，白石豊「平成22年度　附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要第11号　pp93-97　2011

8）青木真理,金成美恵，鶴巻厚保，根本光二，小林修，小針伸一，白石豊「平成23年度　附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要第13号　pp65-69　2012

9）青木真理,金成美恵，小寺真紀，嶺岸知弘，小針伸一，嶋津武仁「平成24年度　附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要第15号　pp101-106　2013

10）青木真理,金成美恵，加藤梓，宮崎映理子，嶺岸知弘，大越一也，嶋津武仁「平成25年度　附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要第15号　pp53-58　2014

11）青木真理,金成美恵，加藤梓，宮崎映理子，高萩雅人，大越一也，嶋津武仁「福島大学附属中学校の教育相談室活動について～スクールカウンセラーによる全員面接の試みに焦点づけて～」福島大学総合教育研究センター紀要第20号　pp37-44　2016

12）青木真理,金成美恵，野地恵美子，相模由紀，村上淳，大越一也，川本和久「平成27年度　附属中学校「教育相談室」活動報告～２年目の全員面接に焦点をあてて～」福島大学総合教育研究センター紀要第22号　pp39-44　2017

13）青木真理,金成美恵，野地恵美子，相模由紀，澤藤晃治，大越一也，川本和久「平成28年度　附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要第24号　pp63-70　2018

14）青木真理,金成美恵，野地恵美子，相模由紀，菅野浩智，川本和久「平成29年度　附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要第26号　pp47-52　2019

15）青木真理,金成美恵，菅野江美，相模由紀，蓮實修一，菅野浩智，佐久間康之「2018年度　附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要第１号　pp49-54　2020

16）青木真理,金成美恵，菅野江美，相模由紀，嶋森裕二，菅野浩智，佐久間康之「2019年度　附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要第３号　pp43－49　2021